

現地通信

フィリピン雑感

片山 裕*

それ以前にも時折報道されることはあったらしいが、squatter 問題がほとんど連日のように新聞の第1面を飾り始めるようになったのは、私がマニラに着いた1982年6月初旬のことであった。まず、完成間もないフィリピンの新しい表玄関、新マニラ国際空港周辺の公有地を占拠している squatter が槍玉に挙げられた。陣頭指揮をとったのは、居住環境相兼マニラ首都圏知事のイメルダ大統領夫人。マスコミは「都市環境改善の進展を妨げる」 squatter たちへの彼女の怒りと「断固たる決意」を大きく取り上げた。

確かに、真新しい国際空港の建物と、その目と鼻の先の道路沿いの公有地を埋めつくす無数の shanty は、余りにも鮮やかなコントラストをなして、この国に着いたばかりの外国人に与える印象は強烈なものではあった。「イメルダ外交」と称される派手な外交活動や、国内においては一連の首都圏浄化運動、さらには芸術・芸能分野への肩入れを通じて、フィリピンの〈近代国家〉としてのイメージ宣揚に力を注いでいるイメルダ夫人にとって、squatter たちは目障りではならなかったに違いない。彼女の苛立ちは、テレビや新聞の報道によっても、よくこちらに伝わってきた。

しかし、だからといって、フィリピンにおける squatter 問題が、政府・マスコミ 一体となったキャンペーンくらいで解決されるほど容易でないのも、また事実である。ある統計によれば、1956 年末時点でのマニラ首都圏の推定人口 650 万人。うち squatter の数は、20万世帯（圏内415カ所）、160万人にのぼり、さらに驚くべきことには、そうした squatter も含めたスラム人口は全人口のなんと80%にも達するという。

政府やマニラ首都圏は squatter 対策をつぎつ

ぎと発表していったが、それも一段落したころ、突如、professional squatter という見馴れない言葉が新聞紙上に登場した。それは、「豊かな squatter」という奇妙な言葉とほぼ同義で使われていた。6月20日前後のことである。このころから政府マスコミの攻撃目標は squatter 一般ではなく、豊かな、職業的な squatter へと絞られていった観がある。

6月25日、それまでほとんど沈黙を守っていたマルコス大統領が、初めて記者会見で squatter 問題を真正面から論じた。彼は professional squatter を次のように定義した。「それは、他人の土地を不法占拠すること、そして、他人の土地をつぎつぎと渡り歩いて、その利権を売って生計を立てている輩のことである」。彼は、そうした職業的な squatter には断固たる民事・刑事上の対抗手段をとるが、他方、田舎から出てきて行き場がなく、やむなく公有地に生活している人々には、relocation を進めるつもりであると、明確に、豊かな squatter と貧しい一般の squatter とを区別してみせた。また彼は、席上記者団の「どうして政府や自治体の relocation 対策にもかかわらず、squatter たちは大都市に留まりたがるのか」との質問に答え、それは、彼らが働ける場所の近くに住みたいと望んでいるからだと言いつつ切った。

この記者会見は、イメルダ夫人に代り、マルコス大統領自らが初めて squatter 対策の前面に出てきたものであったが、同時に政策担当者が6月初めからの一連のキャンペーンで、初めて squatter 問題の根深さとその解決の困難さを率直に認めたものでもあった。それは敗北宣言に似ていた。私は squatter 報道が下火になるだろうとの予感をもった。予感は当たった。その後、squatter 問題は首都圏の治安に関する記事によって次第に紙面の片隅に追いやられ、やがて姿を消した。

* Yutaka Katayama, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

これがマルコス大統領の政治スタイルの一つを典型的に示す事例であるかどうか、私には判断を下すだけの自信がない。しかし、彼が公の場で、ある問題を取り上げたときには、その問題解決についてすでにある程度の成算が立っているか、あるいは收拾策が用意されたときであるとの印象は、そう的外れではないような気がする。また、そうした場で往々にして彼がある種の間人臭さ——もちろん彼なりに計算しつつしたものではあろうが——を垣間みせるとの印象も。

いまマルコス大統領は、反政府活動の活発化に対し、しきりに警告を発している。

※ ※ ※

中部ルソンの A 県でも有数の大地主とされる B 氏から聞いた、新人民軍 (NPA) のすさまじいばかりの浸透ぶりには、さすがに驚いた。同県にある 30 余の municipality のうち、いまや七つまでが NPA の事実上の支配下に入っていると、B 氏は、私たちの反応を楽しむかのように、言い切った。「要するに、マルコスの進めた農地改革は完全に失敗したのですよ。地主ばかりか農民の多くが昔に戻りたがっています」。NPA と地主との奇妙な共存関係も、彼の口から語られると生々しいほどのリアリティーがあった。「私は自分の村のだれとだれが NPA のメンバーであるか知っていますが、決してそれを国家警察軍 (PC) に通報しません。その代り、彼らも私を襲撃しないというわけです」。彼の口調には時として得意さ、さえ感じられた。ただその B 氏も、特別に目をかけていた青年が NPA としてビサヤ地方で逮捕された話に触れたときには、さすがに口ごもりがちであった。「なぜ彼が NPA に走ったのか、私には分かりません」。B 氏のこの言葉が、いまでも強く印象に残っている。

※ ※ ※

同じタガログ語の語学学校に通っていた若いカナダ人とアメリカ人からなるグループには、つねづね感心していた。彼らは、カトリックの宣教師であった。まず勤勉さ。また、語学学校の授業方針へのみごとな適応ぶり。そして、人をそらさない応対。すべて年上の私より一枚も二枚も上手であった。何ごとに対しても不器用にしかふるま

ない私は、勢い自虐的になっていった。そんな私が彼らにも気にかかったのだろう、あるとき、食事に招待してくれた。初めて彼らと長時間もった会話は、私としては充実したものであった。彼らにしてもそうであったらしく、われわれは〈友人〉になった。それから、学校外での付き合いが始まった。

フィリピン滞在もあと数日を残すばかりとなったある日、私は彼らと最後の夕食をともにした。食事後、何かのきっかけから、話題が日本の教科書問題になった。私は、日本と他のアジア諸国との関係のあり方のむつかしさ、多くの日本人が他のアジア諸国民にもっている屈折した思いについて語った。話しているうちに私は、以前から聞きたいと思っていて聞けないでいた質問を、彼らにぶつけてみたいという衝動を抑え切れなくなった。

外国人である彼らがフィリピンに来て伝道するというのがどういうことを意味するのか、私は問うた。彼らは私は何を聞き出そうとしているのか正確に感じとったらしく、途端に寡黙になった。そして、うつむきながら、言葉を選ぶようにポツリ、ポツリと答え始めた。私は自分の発した質問のある種の居丈高さに、いまさらのように恥じ入り、一日本人としてフィリピンを研究することの意味について、改めて拙い言葉で語った。

夜も更けて彼らの家を辞さなければならなくなったとき、そのうちのひとりが、部屋の片隅で新約聖書に何ごとか書き込んで私に渡してくれた。それにはこう記されてあった。

ユタカ。きみはこれまでずっとすばらしい友人であった。われわれは、きみと知り合えたことを大変しあわせに思っている。また、きみがわれわれからも何かを学んだと感じていてくれていることを誇りに思っている。きみは、きみとわれわれとの間にある違いをみたという。確かにその通りかもしれないが、それは、主キリストとこの聖書とがわれわれにこれまでずっと多大の影響を与え、同時にある目標を与えたせいであると理解してもらえないだろうか。

どうかお元気で。

きみの友人たちより

(京都大学東南アジア研究センター助手)